

共通教科書『APassage to English』を用いた英語 の授業

大津, 隆広
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5364>

出版情報：言語文化論究. 13, pp.149-161, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



共通教科書『A Passage to English』を用いた英語の授業

大 津 隆 広

1. はじめに

このたび、『A Passage to English 大学生のための基礎的英語学習情報』（九州大学大学院言語文化研究院英語共通教科書編集委員会編，九州大学出版会）が出版された。表向きは大学の共通教育科目としての英語のテキストであるが，そうした授業で通常使用されているテキストとは大きく異なる。ひとつは，大学での英語学習の際に必要な基礎知識と語彙等のリスト，さらには読解用の英文を1冊の本にまとめ，大学での英語学習に必要な情報を学生に提示したことにある。また，教官と学生双方が学習内容を自由に選択できるように，できる限り多種多様な情報を盛り込んだことも特徴の一つである。そしてこのテキストは平成13年度より九州大学1年次全学生を対象とした「英米言語文化演習Ⅰ」という授業において一斉に使用される。本稿の目的は，英語学習における英語の基礎的知識の必要性に関して九州大学の1・2年生に行ったアンケートの結果を示し，このテキストを用いた効果的な教授方法の一例を示すことにある。¹⁾

2. 大学生に必要な英語学習の基礎的情報

九州大学の学生の外国語の必修単位は，文系（文学部，教育学部，法学部，経済学部）学生では第一外国語7単位，第二外国語5単位，理系（工学部，理学部，農学部，薬学部，歯学部，医学部）学生では第一外国語6単位，第二外国語4単位である。平成12年度入学の学生に関して，英語を第一外国語とするものが全体のおよそ98%を占めているという事実を考えると，ほとんどの学生が2年次までに英語を少なくとも6単位あるいは7単位履修することになる。

平成12年度に言語文化科目Ⅰとして1，2年次の学生に開講されている英語の科目（括弧内はクラスサイズ）は次のとおりである。

「インテンシブ英語演習Ⅰ」（20名程度）

「インテンシブ英語演習Ⅱ」（20名程度）

1) テキスト編集の経緯，理念，および内容紹介に関しては鈴木右文著「英語共通教科書の試み」（『英語英文学論叢』第50号，九州大学英語英文学研究会編，2000年2月発行）を参照されたい。また，編集委員では『radix』No. 26（九州大学大学教育研究センター，2000年9月発行）および『言文フォーラム』No. 24（九州大学大学院言語文化研究院，2001年3月発行予定）にも，テキストに関連した記事を寄せている。

「英米言語文化演習Ⅰ」(100名程度)

「英米言語文化演習Ⅱ」(80名程度)

「総合英語演習」(50名程度)

「選抜英語演習」(15名程度)

授業で使用されるテキストは、基本的には上記の科目の理念やクラスサイズをもとに決められる。²⁾ 学生は、こうした種々の科目の受講を通して、エッセイや論説文を精読したり、リスニング力を養成したり、短いエッセイを書いたり、ネイティブスピーカーの教官と会話練習を行うなど、実践的な方法に基づいて英語の4技能を学んでいくことになる。表1は平成12年度前期に九州大学で言語文化科目Ⅰとして開講された205コマの英語の授業で用いられた教材の種類とその使用の割合である。

表1

教材の種類	論説・小説	総合教材	検定・資格	英文作成	ビデオ教材	リスニング・会話	その他 ³⁾
全授業に占める割合	19.5% (40)	21.0% (43)	1.5% (3)	8.8% (18)	3.9% (8)	30.7% (63)	14.6% (30)

() 内の数字はコマ数。副教材が使用されるケースがあるが、それは含めていない。

このように多種多様な英語学習の機会が学生に与えられることは、学生自身が英語を学ぶ目的を明確化し、英語力を総合的に養成するという点では有意義なことである。さらに、2年次には「英米言語文化演習Ⅱ」と「インテンシブ英語演習Ⅱ」という異なる内容とクラスサイズの科目のうち、学生の意欲や目的意識によりどちらかを選択することが可能である。学生自身によるクラスの選択の幅が広がることで、今後は学生間の英語力の差が入学時以上に広がることになるであろう。実際に授業を行ってみると、高等学校、あるいは大学受験の時期に学んだはずの英語の知識が、意外と身についていないことに気付くことが多い。果たしてこれは英語教師のみが感じることであろうか。

そこで、九州大学の1、2年次生が英語学習において英語の基礎的な知識を必要としているかについての意識を探るために、平成12年度前後期に1年生207人、2年生177人を対象にアンケートを行った。⁴⁾ 大学で英語を継続して学習する際に必要な英語に関する知識や情報というものを、英語学習法、発音法、語彙力、構文を見極める力、英文作成法、英

- 2) 1年次の必修科目である「インテンシブ英語演習Ⅰ」では会話練習や英文作成などを通して英語の発信能力を養成し、「英米言語文化演習Ⅰ」では英語の言語的あるいは文化的な知識を学ぶ。「総合英語演習」は4技能を総合的に学ぶクラス指定の授業であり、「選抜英語演習」は成績と学習意欲に基づき教官により選抜された学生からなる少数精鋭のクラスである。また、英語の運用能力をさらに養成するための多彩な内容からなる「インテンシブ英語演習Ⅱ」と「英米言語文化演習Ⅱ」は2年次に開講される。
- 3) 教官の自主作成教材がこれにあたり、教材の内容については把握していない。
- 4) アンケートは英語を専門に学ぶことを目的としない学部(1、2年生に対して行った。1年生が所属する学部は法学部、経済学部、工学部、理学部、歯学部、2年生が所属する学部は法学部、工学部、理学部、薬学部である。

語圏の文化等に関する基礎的な情報等の集合であると仮に定義してみよう。学生自身の中でそれらがどのように整理されていると彼ら自身認識しているのであろうか。質問(1), (2)でそれらを問い、表2はその結果をまとめたものである。

質問(1)「あなたは、高校までの英語の学習の中で英語の知識や情報が整理されていると感じますか。」

質問(2)「現在、あなたは大学で英語を使い、読む・聞く・書く・話すことを目的とした演習を行っています。その際、英語に関する知識や情報が不足している（それがあればもっとうまく演習を受けることができる）と感じることがありますか。」

表2

質問 \ 回答	感じる	あまり感じない	全く感じない	わからない
(1) 高校までの学習で英語の知識や情報が整理されていると感じますか。	13.0% (27)	56.0% (116)	20.3% (42)	10.7% (22)
	14.1% (25)	55.9% (99)	23.2% (41)	6.8% (12)
(2) 現在、英語に関する知識や情報が不足していると感じることがありますか。	69.1% (143)	18.4% (38)	4.3% (9)	8.2% (17)
	72.9% (129)	19.2% (34)	2.8% (5)	5.1% (9)

上段は1年生、下段は2年生を表す。() 内は学生数。

質問1に関して、英語の知識や情報が整理されていないと感じるとする回答が1年生、2年生ともに75%を超える。学生は大学入学時から既にそれらを整理することなく単に暗記し、理解していると感じている。学生の中には、高校までの英語の知識は受験のためのものであり、受験勉強という特殊な方法では個々の英語の知識が有機的に関連することはないとコメントするものもいた。質問2は大学での英語学習の際に感じた英語の知識や情報の不足について問うものである。1年生、2年生ともに学生の70%程度が、知識不足を感じている。その割合が2年生がわずかに大きいのは、大学で学習を継続するにつれてその認識が強められることを示唆している。また、両質問とも明確に意思表示ができない「わからない」という回答は1年生に多かった。大学で学習する英語との関わりがまだ浅いために、判断が難しいのであろう。

実際にそうした知識や情報の不足を補い、大学での英語学習を効果的に行うためには、それらの整理を目的とする授業が必要になる。次に、そのような授業の必要性について質問(3)を行い、表3のような結果を得た。

質問(3)「あなたは、英語に関する知識や情報を体系的に学ぶ授業が大学で必要だと思いますか。」

表 3

質問	回答	必要である	必要ではない	どちらでもない
(3) 英語に関する知識や情報を体系的に学ぶ授業が必要だと思いますか。		35.3% (73)	13.5% (28)	51.2% (106)
		40.7% (72)	11.3% (20)	48.0% (85)

上段は1年生、下段は2年生を表す。() 内は学生数。

英語の知識不足の認識がそれを補う授業の開講の必要性に直接結びついているとは読み取ることとはできない。しかし、これまでそのような授業が存在しなかったわけであるから、ある意味では必要性を判断できないという過半数におよぶ回答が出るのは当然かもしれない。明確な形でそのような授業を開講すれば、自ずとその必要性を感じてもらえると好意的に解釈したいものである。また、1年生と2年生を比べると、必要性を感じると答えた割合が2年生の方が高いのは、質問(2)の意識と比例しているからであろう。1年次の前期に回答した学生は大学の英語演習が始まったばかりであり、それに対して2年次の後期に回答した学生はすでに5あるいは6科目の英語演習の受講が完了していることになる。この違いが、両者の認識の差に大きく影響を与えていると思われる。1年次前期は受験直後であるために、それほど知識不足を感じることはないのであろう。しかし、2年次後期にもなると、大学の英語学習がそれまでのものとは異なること（つまり英語の知識とその応用力が必要であること）に気付いたり、英語学習の時間が減ることで、高校までに習得した知識が次第に忘れ去られることを実感するとも考えられる。

最後に、次のような質問を行った。

質問（4）「あなたは大学でも英語を学習する意欲がありますか。」

表 4

質問	回答	あ る	な い	どちらとも言えない
(4) 英語を学ぶ意欲がありますか。		82.6% (171)	13.0% (27)	4.4% (9)
		83.1% (147)	11.3% (20)	5.6% (10)

上段は1年生、下段は2年生を表す。() 内は学生数。

意欲を示す学生が予想以上に多かったことは喜ばしいことである。また、意欲があると答えた学生は全員、質問(3)で英語の基礎的情報を教わりたいと希望していることがわかった。そのような授業の開講が早急に望まれており、共通教科書を用いて全学生に平等にその機会が提供されることはとても意義深いことである。

大学の授業で用いられる教材のほとんどが市販の大学教科書である。中には英語の運用能力に必要な基礎知識について解説を加えたものもあるが、分量は少なく十分であるとは言えない。これまで大学で行われてきた英語の授業で情報の整理がなされなかったと批判しているわけではない。ただ、体系的には行われなかった、あるいはその度合いがクラスにより偏りがあったと述べているのである。九州大学大学院言語文化研究院英語科が平成

13年度より1年次の全学生対象に「英米言語文化演習Ⅰ」という科目で一斉に共通教科書『A Passage to English 大学生のための基礎的英語学習情報』を用いるに至った理由は、大学入学の早い段階で一定の英語の知識や情報を整理し、そうした共通の知識基盤を身につけた上で、学生にはそれぞれ個々の技能の習得に向かって欲しいと考えるからである。

3. 『A Passage to English』の効果的な使用方法

3.1. 第1部と第2部の相互参照性

本テキストは形の上では第1部と第2部からなる2部構成である。第1部は内容的に2つに分かれており、前半の第1章から第9章（第7章から第9章までは英文で書かれている）までは英語の学習法、音声、文法、文章作成、英語圏の文化などに関する解説を書き下ろし、読み物の形でまとめられている。さらに、第1部後半の第10章から第16章までは、語彙、熟語、表現などを広範囲にわたり網羅した資料となっている。一方、第2部はタイムなどの雑誌や読みやすい専門書から抜粋された精読向きの英文に注釈を付した20章からなる。以上、全編300頁以上からなる本テキストは以下のように3つの内容に分けることができる。

第1部第1章～第9章：英語学習情報の解説

第1部第10章～第16章：語彙等の資料

第2部 Chapter 1～Chapter 20：読解用の英文

本テキストの目的は、副題が示すように英語の基礎的な学習情報の整理にある。編集委員の中で、情報が指すものは、第1部の解説と資料だけではない。英文を読むことで、さまざまな英語表現、構造や語彙の使い方の法則などを情報として収集することができると考えれば、第2部も有効な生の英語情報であることになる。

本テキストの特徴は、学習者は網羅されている英語の情報を自主的にアクセスできるという保証のもとで、教官はそのすべてを授業で教えるのではなく、自らの教育方法に基づいた授業の組み立てが可能なことである。学生もレファレンスブックとして、あるいは情報保存の場所として必要な時に手にとることができる。しかし、第1部と第2部の相互参照という形で授業を組み立てることで、本テキストの効果はさらに高まると考えられる。学習者は第1部で得た知識や情報を第2部の英文の中で確認したり、英文を読むことで、基礎的な知識へとフィードバックすることができる。相互参照はこのテキストの目玉であり、それを押し進めなければ、結局は従来の文法の授業、あるいは英文読解の授業と同じようなものになるであろう。第1部と第2部を結び付けることで、英語の情報力の定着はより活性化されると考えられる。⁵⁾

5) もちろん、両者を分けて教える（あるいは、授業では片方しか用いない）ことも可能であり、本章で述べることはそうした方法および効果を否定するものではない。

3.2. 具体的な使用方法および相互参照の例

テキスト使用者の便宜を図るために、半年間テキストを試行的に使用した経験をもとに、第1部と第2部の相互参照の可能性を含めて、授業の具体的な組み立てについて考えてみたい。第1部の第1章から第6章までの解説は日本語で書かれているので、学生には授業前に一読するよう勧めた方が授業を円滑に行うことができる。

3.2.1. 第1章「英語の勉強方法：参考文献や検定・この本の説明」

第一講目に、学生の目的意識を調べたり、英語学習に関連するさまざまな情報を与えることで学生の意欲を高めるために使用されたい。オリエンテーションを兼ねて、教官自身の大学時代の英語の学習方法などを紹介されると学生にはよい刺激となるであろう。

3.2.2. 第2章「英語の発音」⁶⁾

日本人学習者が苦手とする英語の発音についての解説である第2章は、2回の授業で消化できる分量であり、母音と子音に関する説明に分けることができる。

母音に関して、[ej], [ɛ], [ɔ:]などの発音の仕方は、説明がなければ学習者には推測がつかないであろう。さらに、[æ], [ʌ], [ə], [ɑ]のような4つの類似した（学習者には同一音であると認識されている恐れのある）母音を発声する際の口腔の形状の違いや、[i:], [ɪ]の音の違いが単に長短の違いではないことなどを解説と練習問題により学生に情報として提示することができる。例えば第2部の Chapter 1の抜粋である(1)の中の summer, lamb, alive, monitored には[ʌ], [æ], [ə], [ɑ]の母音がそれぞれ含まれており、history と sheep には[i:], [ɪ]が含まれている。

- (1) On a soft **summer** night, July 1996, at 5 p.m., the most famous **lamb** in **history** entered the world, head and forelegs first. She was born in a shed, just down the road from the Roslin Institute in Roslin, Scotland, where she was created. And yet her creator, Ian Wilmut, a quiet, balding fifty-two-year-old embryologist, does not remember where he was when he heard that the lamb, named Dolly, was born. He does not even recall getting a telephone call from John Bracken, a scientist who had **monitored** the pregnancy of the **sheep** that gave birth to Dolly, saying that Dolly was **alive** and healthy and weighed 6.6 kilograms, or 14.5 pounds. (Chapter 1: p.248, 1.1-8., 以下太字は著者)

また、[u], [ui:]における本質的な音の違いも、同じ英文の後半にある took と soon を対比することで理解を深めることができる。

子音に関しても、学生には馴染みのない発音記号（[ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ]など）がいくつかあり、説明を要するところである。例えば、歯間音[θ], [ð]と歯茎音[s], [z]の違い、破裂音[b]と摩擦音[v]の違いなどは、説明の後に Chapter 2を読みながら確認することができる。抜粋箇所(2)には、歯間音を含んだ thick, there, 歯茎音を含んだ sensitive,

6) 解説部分や練習問題の発音に関して、九州大学の授業では別途カセットテープが準備されている。

representation (ともに、有声音・無声音の順)、破裂を伴う **basis** と摩擦を伴う **very** が含まれている。

- (2) The **basis** of all our impression is consciousness, or, as Kant said in the opening lines of the *Critique of Pure Reasons*, “**There** is no doubt that all our knowledge begins with experience.” Not only our experience of time, but also our **representation** of time is based upon consciousness. We do not represent the world as it is, we represent our world as we perceive it. If our eyes were **sensitive** to other bands of radiation, for example, we would see a **very** different world: if the retina were sensitive to infra-red radiation, we would be able to see our way clearly in **thick** fog: there would be no thick fog. (Chapter 2: p.250, 1-7.)

発音記号の説明は単調ではあるが、正しい英語の発音に近づけるという練習が大学入学時まで軽視されている事実を考えると、早い段階での説明が必要である。それにより学生は自分の力で辞書を使って単語の発音を確かめることができる。音読ができないということは同時にその音を聴解できないことである。正しい発音へ矯正する意味で学生には第2部の音読を心掛けさせたいものである。⁷⁾

3.2.3. 第3章「語彙力をつけよう」

第3章は語彙形成の規則性について平易な解説を行ったものである。この章は第12章「語彙の整理箱」との相互参照が細かく記載されているので、接頭辞、接尾辞、品詞変化、類義語、反対語など、語彙の例に触れながら解説を行うことができる。さらに、英文の中で語彙の使い方に焦点を当てながら第2部を読むことで、第2部との相互参照について考えてみよう。英文読解中心の授業になると、英語の語彙の意味を日本語で置き換えるだけで過ぎてしまうことが多い。真の語彙力を定着させるためにも、個々の語彙の意味合いを考えながら英文を読む姿勢をつけさせたい。例えば、(3)のような評論的な英文になると抽象的な語彙が多用される。それらの意味や微妙なニュアンスの決定は文脈に深く依存することを学生には教えてあげたいものである。

- (3) As English extends worldwide, its **presence** is widely viewed as **beneficial**. Aims such as **international intelligibility** and **national identity** are positive-sounding and forward-looking. But there is another side to the coin, for English is not always welcome. Its presence may **generate antagonism**, especially when it is perceived to **interfere** with the character or use of local languages. **Nationalistic movements** may totally reject it — and not always peacefully.

There is always **mutual influence** as languages come into contact with each other. English itself has a long history of borrowing from other languages, and is always ready to increase its **lexicon** through the **acquisition** of loan words. When other languages

7) 将来的には、第2部の英文をネイティブスピーカーが録音したものを CD などの音声資料にして教科書につけるなどの工夫が必要であろう。

borrow heavily from English, however, the local reaction may be far less positive. People may complain about the **excessive** influence of English on their language, and their country may even try to **legislate** against it (as in France). Such activities may be passionately pursued, though any **success** is likely to be limited to restricted **domains**, such as official publications or committee dictionaries. (Chapter 3: p.252, 1.1-14.)

さらに、語彙力の増強には第11章「抽象語彙：覚えておきたい単語」、第12章「語彙の整理箱」を用いて単語の小テストを数回行うことで、学生の語彙力を増強させる工夫も必要であろう。⁸⁾

3.2.4. 第4章「動詞に関する知識」

第4章は解説のみで内容を理解するのは難しいかもしれないので、第2部の英文を参照することで学生にその理解を深めてもらいたい。第4章のいくつかの項目における参照の例を挙げる。

(1) 4.3.

他動詞構造の目的語の補語の例として、(4)には補語に *as* 句をとる動詞が多用されている。さらに、(5)では補語に形容詞や過去分詞をとる例である。

(4) As English extends worldwide, its presence is widely **viewed as** beneficial. Aims such as international intelligibility and national identity are positive-sounding and forward-looking. But there is another side to the coin, for English is not always welcome. Its presence may generate antagonism, especially when it is perceived to interfere with the character or use of local languages. Nationalistic movements may totally reject it – and not always peacefully. ...

Lexical invasion is feared because it is **seen as** the thin end of a wedge. Linguistic history contains several examples of English supplanting other languages – Cumbric, Cornish, Norn, Manx, most North American Indian languages. ...

English may be **rejected as** an official language because of its association with colonial history. This has happened several times in recent years. (Chapter 3: p. 252, 1.1-25.)

(5) ... Rudimentary knowledge of elephants would have **kept me safe**: a herd with small calves is particularly alert to danger; elephants don't **like their space invaded**; flapping ears are a direct warning. (Chapter 15: p.286, 1.7-9.)

(2) 4.4.

動詞や形容詞の後に来て名詞節の働きをする *that* 節のタイプについて、(6)では他動詞構造の例 (*treat ... as ~*, *take ... as ~*) に加えて、*be aware* と *believe* の2つの述語が用いられている。*be aware* では *that* 節の内容は書き手自身の事実認識に限り無く近く、*believe* に導かれた *that* 節の内容はアメリカ人の信念を表しているだけで、断定性は弱い。

8) 資料を使った小テストのやり方は3.3.を参照のこと。

(6) I don't know when I first became **aware** that I was deeply interested in time as behavior, not "what is time?" in the philosophical sense. Mine has been more of a phenomenological approach — that is, I have been most interested in how time is used and structured by different people in different situations and in the effects of these differences. For example, white Americans, particularly when living in Mediterranean countries and in Latin America, **treat** time **as** an unconscious language, the rule of which are binding. ...

It wasn't hard for me to see that the Americans were **taking** time **as** a constant in social relationships and **believed** that it was something that could be relied on to give a truer reading of the nature of a relationship and how the other person felt than what was said in words for the sake of politeness and convention. (Chapter 8: p.262, l. 1-26.)

最後に、4.1., 4.2. の理解を深めるために、第13章「基本動詞を用いた熟語」を用いて小テストを行うこともできる。動詞や形容詞の文型についての知識は第15章「補部：動詞・形容詞が何を従えるか」を参照してもらいたい。

3.2.5. 第5章「構造の知識」

第5章も第1部の中で解説が難しい箇所である。できる限りたくさんの第2部の例を参照することで、ここで扱われる種々の構造に関する知識が補完されるであろう。

(1) 5.2.

形式主語構文は学生にとって比較的馴染みのある構文であるので、(7), (8)のように、長いまとまりを持ち重要な内容を担う to 不定詞句や that 節を文末に置く表現が好まれるということは容易に理解できるであろう。

(7) **It was wrong to think that I could communicate with a strange elephant under these circumstances.** Yet he commicated very clearly to me: he was angry and I should leave. I believe this is a realistic description. ... (Chapter 15: p.286, l.11-13.)

(8) ... On the other hand, if we were just 1 percent farther from the Sun (94 million instead of 93 million), the glaciers would take over. And if the Earth's orbit were a little more elliptical than it is so that it was too close in some spots and too far in others, it would constantly go from one extreme to the other. This greatly narrowed the ecosphere. Clearly, **it is just the greatest stroke of luck that Earth has a nearly circular orbit that keeps it within that dreadfully narrow ecosphere at all times.** ... (Chapter 17: p.292, l.27-32.)

(2) 5.3.

構造的に独自性をもつ形式主語構文に比べて、文の一部がまとまりのある切れ目から文末へ移動された構文は理解しづらいので、第2部での例を参照しよう。(9)では、主語である Little の後の前置詞句 (about how the rules of a language — grammar and syntax — are codified in the mind) が切り離されて文末へ移動されている。また、(10)の2例では、と

もに先行詞 a call の後の関係詞節が後置されることで、重要な情報としてベルベットモンキーの呼び声の意味の違いに焦点が当てられることになる。

(9) For children, learning a language seems effortless, while adults must struggle, often unsuccessfully, to acquire a second language. This is a cognitive mystery researchers are only beginning to understand. Little is known, for example, **about how the rules of a language – grammar and syntax – are codified in the mind.** (Chapter 4: p.254, 1.1-4.)

(10) ... There is clear evidence that velvet monkeys use separate calls for each of these types of danger because predictable responses consistently follow each call. If the threat is from hawks or eagles the call given causes the vervets to look up. If the threat is from a snake a call is produced **that causes velvets to look down.** If a large predator cat is nearby a call is produced **that causes velvets to climb trees.** Apparently the calls not only differentiate among types of danger but also communicate what appropriate responses should be taken. (Chapter 11: p.268, 1.23-29.)

(3) 5.4.

文単位で生じる倒置の一つの例として、条件節の代わりをする倒置の例が(11)であり、here, there が文頭に置かれた場合に生じた倒置が(12)の2例である。

(11) ... A couple of paragraphs back, I managed with no effort to include four different words referring to robbery in just three sentences: ‘plunder’, ‘larceny’, ‘peculation’ and ‘theft’ (all but the last are borrowed!). **Had I cared to tax my ingenuity and the reader’s patience,** I could have injected as many again. (Chapter 14: p.280, 1.28-31.)

(12) “Ah, me,” he said to himself, “we must get out of this wild canyon. Here we must leave four of our little lambs dead. Bad luck! But...then...here comes the light, the sun, and, after all, this is another day.”

As the shepherd was extinguishing the camp fire, **there appeared on the top of the hill a form with arms stretched to heaven as though offering himself to the sun.** (Chapter 10: p.266, 1.34-p.267, 1.3.)

(13), (14)は、否定要素が文頭に来るために生じた倒置の例である。

(13) **No longer is the air over many of America’s cities visibly sullied and increasingly unhealthful.** Rather, from 1970 to 1997, combined emissions of the six major pollutants the government measures – carbon monoxide, nitrogen oxides, hydrocarbons, particulates, sulfur dioxide and lead – declared 31 percent, says the report, which gives much of the credit to government tailpipe controls on cars. (Chapter 6: p.258, 1.6-10.)

(14) For centuries, the English-speaking peoples have plundered the world for words,

even as their military and industrial empire builders have plundered it for more tangible goods. And linguistic larceny has this major advantage over more conventional types of theft: it enriches the penetrator without impoverishing the victim. **Nor have these centuries of linguistic speculation left English 'faceless and clichéd'**; on the contrary, they have given us the largest, more variegated and most expressive vocabulary in the world. (Chapter 14: p.280, 1.1-6.)

倒置の最後の例として、(15)は場所表現が前置されたために生じた倒置である。明らかに、場所表現である *somewhere across the ocean or beyond the mountains* は旧情報であり、倒置により結果的に主語である女性の定義に焦点が当てられることになる。

(15) ... Nature, especially when remote from traffic and agriculture, responds like a devoted mistress to his every mood. Oceans and mountains, forest and heath provide the enchanted scenery for his unending drama of the defiant lonely spirit. But **somewhere across the ocean or beyond the mountains is the Woman for whom the Romantic is searching, the Woman who will lead him out of his dream of love, those erotic reveries that Rousseau describes, into a real but endlessly ecstatic relationship.** (Chapter 12: p.272, 1.4-10.)

(4) 5.5.

いわゆる強調構文 (it 分裂文や wh 分裂文) を用いることで、構造的に情報の新旧あるいは重要性を区別することができる。まず、it 分裂文の例を第2部から参照してみよう。(16)は携帯電話が健康に与える影響を述べる文脈であるので、その問題の所在が「頭への近さ」にあることを重要な情報として書き手は述べている。つまり、it is 以下の情報が焦点となっている。

(16) The Bristol work, to be published next month in the International Journal of Radiation Biology, follows a study carried out by Dr. Kjell Hansson Mild on 11,000 mobile phone users in Norway and Sweden, which showed an increase in headaches and fatigue. **"It is the proximity to the head that seems to be the problem,"** said Mild. "When the mobile phone users switched to devices such as earpieces, 80 percent of the symptoms disappeared. (Chapter 20: p.304, 1.32-p.306, 1.1.)

これに対して談話の流れが意識される場合には、(17)、(18)のように情報提示の順番が(16)とは逆になることがある。

(17) ... Our words can glide with the supple grace of a ballerina or lumber at the lumpish pace of a pedant; they can embellish our utterances with elegant arabesques of sound and sense or obfuscate them with meretricious and sesquipedalian rhetoric. They can scorch like the desert sun, caress like a summer's breeze, sting like winter sleet; they

can say anything – or nothing.

It is the enormous and variegated lexicon of English, far more than the mere numbers and geographical spread of its speakers, that truly makes our native tongue marvelous – makes it, in fact, a medium for the precise, vivid and subtle expression of thought and emotion that has no equal, past or present. (Chapter 14: p.282, l.13-21.)

- (18) ... Mill distinguished between “received opinion,” uncritically accepted by an audience from some figure of authority, and an opinion formed through controversy and critical deliberation. **It is only through the latter process, Mill argued, that the individual should be able to hold and express an opinion with genuine conviction.** ... (Chapter 19: p.300, l.27-31.)

これらの例で、it is の後の情報は先行文脈で既に言及されている情報であり、書き手が重要な情報として提示したいのはむしろ that 節の内容である。そのため、(17)は「そうしたたくさんの多彩な英語の語彙があるお陰で……」、(18)では「その後者の過程を経てのみ……」という読み方が好ましい解釈となる。

一方、(19)、(20)は wh 分裂文の例である。(19)の wh 節の「ルソーがわれわれと何らかの関わりをもつ」ということは文脈から自明の理であり、また(19)の wh 節の「ニクソン氏には何か恐れているものがある」ということは先行文から簡単に察することができる。その点で、ともに wh 節の内容は旧情報であり、書き手が伝えたい重要な情報は補語の内容である。

- (19) ... A baby is not free but severely conditioned by its helplessness. Primitive men, moving fearfully and warily in their own elaborate world of menacing spirits, taboos and tribal customs, have less freedom than we have. With the famous *Social Contract* and the arguments that Rousseau based upon it, we have nothing to do here. But **what does concern us**, because it is something he bequeathed to the Romantic Age and we have not done with it even yet, **is his idea that freedom has nothing to do with any appreciation of necessity, any accommodation to the real world, the right balance between the conscious mind, looking outward, and the unconscious;** ... (Chapter 12: p.272. l.28-35)

- (20) ... After 48 hours the wish for death can be met. For Lloyd Nickson, a 54-year-old Darwin resident suffering from pulmonary fibrosis, the legislation means he can get on with living without the specter of a terrifying death from his respiratory condition. “I’m not afraid of dying from a spiritual point of view, but **what I was afraid of was how I’d go**, because I’ve watched people die in the hospital fighting for oxygen and clawing at their masks,” he says. (Chapter 16: p.288, l.21-26)

3.2.6. 第6章「英文解釈・英作文で誤りやすい文法項目」と第7章「電子メールでの英文の書き方」

第6章で文法事項を確認し、第7章で電子メールの書き方を解説することで、学生は実際に電子メールを作成したり、英文作成練習などを行うことができる。さらに、第10章「日常生活の語彙」、第14章「覚えておきたい口語表現」、第16章「学術的教養：学部別語彙表現」の中の語彙を使用すると学生の作業ははかどるであろう。

3.2.7. 第8章「英語の諸相」および第9章「英語圏の社会と文化」

第8章と第9章は英文で書かれているので、それらを読みながら、同時に言語的、文化的、社会的視点からみた英語のさまざまな側面が知識として蓄えられることであろう。

3.3. 資料編（第1部第10章～第16章）の使用方法

同じ第1部に属してはいるものの、第10章から第16章のいわゆる資料編は、他の章とは性質を異にしている。情報量が膨大なために授業で取り扱うというよりも、小テストの課題としたり、学生の自主学習の課題とする方が好ましい。語彙力増強のために小テストを行う際は、学生自身の目的意識により、暗記する項目を自ら選ばせた上で行うやり方も考えられる。つまり、どの情報を選択し身につけるかも学生自身に委ねるのである。例えば、学習者自身にとって難度の高い語彙を中心に選ばせるとか、学部に関係のある語彙（第16章から出題する場合）など、暗記する目的が少しでも明確な方が学習意欲をうまく引き出すことができるであろう。

4. 終わりに

本論では、英語に関する情報や知識の整理を大学生がいかに関心しているかを示し、『A Passage to English』がどのようにそれを実現できるかを述べた。そして、それを実現する効果的な方法として、第1部の解説をもとにして第2部を参照する形での本テキストの使用方法を提案した。もちろん、この提案が理想的な使用方法であるというわけではないし、おそらく使用者の多くは第2部から第1部への参照により授業を組み立てるであろう。

第1部と第2部の情報のリンクがこのテキストの大きな特徴であると編集委員一同は考えている。編集の際に時間の余裕がなく、細かな相互参照の指示を付すことはできなかったが、次回の改訂時により詳細で丁寧なものへと近づけたいと思う。⁹⁾

9) 本テキストを使用した具体的な授業の組み立てに関しては、九州大学大学院言語文化研究院のホームページ (<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~ilc>) 内の全学共通教育科目シラバス（大津隆広の2000年度後期木曜3限、金曜1限のクラスのシラバス）を参考にさせていただきたい。解説、英文読解、小テストに要する時間はそれぞれ、30分、45分、15分を目安に考えている。